

政治哲学の公共性と秘教性

スピノザ主義的啓蒙とその周辺

オーガナイザー: 上野大樹(一橋大学) 提題者: 齋藤拓也(北海道大学)、馬場智一(長野県立大学)、近藤和貴(拓殖大学)

芸術・美学や自然哲学の場合と同様、政治哲学にかんしても、ルネサンス人文主義による古典古代的伝統の再生とその後の発展や転回という知的潮流のなかで啓蒙を位置づけなおそうという動向が顕著となっている。こうした傾向を象徴するのが、公的市民人文主義という分析概念であろう。ケンブリッジ学派の思想家たちは、12世紀ルネサンス以降のスコラ学や一部のアヴェロエス主義とは少なからず異なるかたちでイタリア半島にもたらされた政治学的なアリストテレス受容や、キケロの再読に注目し、そこに歴史叙述と結びついた古典的共和主義の再生を看取した。啓蒙を特徴づける政治改革と革命も、理性にもとづく理想社会の建設と歴史からの切断といった構築主義的な精神のみに由来するのではなく、そうした異教由来の人文主義的政治思想の新たな展開としても把握できるという点が強調されるにいたる。

君主のために統治の秘儀を伝授するマキアヴェリズムが官房政治の機密性や権謀術数を強調したのとは対照的に、こうした人文主義的な系譜にあつては、政治はむしろ公共性の理念と内在的に結びつく。ポリアスはレスプブリカと翻訳的に同一視されたのである。さらには、古代ギリシア・ローマ文明における学芸の驚くべき発展と軍事的栄光を歴史的に解明しようとする古典文献学者たちがその秘密を政体に求めた結果、当時ヨーロッパで圧倒的に支配的であった君主政にたいして、世襲の君主を戴くことのない共和国の優位を示唆する急進的な言説も台頭してくる。そこでは、市民の美德を育む政治的公共性と共和政体とは不可分なものだとも理解された。

そしてこうした観念は、啓蒙期にまで小さくない残響をひびかせている。先行する近世と比較するならば、長い18世紀はむしろ絶対王政や寡頭政の確立にともなう主権国家単位での政治的安定と経済成長によって特徴づけられる。ハーバーマスが論じるところとは微妙に異なり、ブルジョワ的公共性も、啓蒙知識人たちのある種脱政治的で穏健主義的な傾向をあらわしている。公共精神をもった共和国の愛国者市民(patriot, citoyen)は、経済的利益を自由に追求する市民(bourgeois)へと変貌し、サロンのような文芸的公共圏では公市民の徳よりは洗練された作法が求められた。今日の表現でいえば、政治的自由よりも市民的自由を希求する新興市民層は、統治機構と区別された市民社会で形成される公論(opinion publique)こそが真の公共的利益を体現すると主張し、それを不当に私物化しようとする国家権力は公共性の名の下に糾弾されることとなる。ハーバーマスは、こうした事態を的確に表現した哲学的議論として、カントの「理性の公共的使用」の革新的用法をとりあげている。しかし、もちろんカントの政治哲学を古典的共和主義へとすっかり還元はできないものの、近年の研究はカントが人文主義者たちの歴史教養をも駆使しながら、共和政構想の実現を志向しつつ当時の言論空間へ実践的に介入していた姿を描いている(Cf. 網谷壮介)。そこでの世界市民社会の公共性は、ブルジョワ的というよりは公民(Staatsbürger)的で政治的なものであるし(加藤泰史、金慧)、共和主義的パトリオティズムが大きな位置を占めていた(齋藤拓也)。そうだとすると、やはり絶対王政のもとで肥大化する統治権力にたいして公共精神をそなえたパトリオット市民の共同体からの仮借ない批判と公開性要求

を展開した古典的共和主義者たちとカントとの距離は、通常言われるより遥かに近いし、また、カントの徳倫理的側面に光をあてることもあながち的外れとはいえないかもしれない。

本WSでは、同時に、啓蒙のこうした輝かしい一面とはちょうど表裏の関係にあるもうひとつの側面にも焦点をあてたい。政治哲学の秘教的な側面である。まず、ルネサンス人文主義からの連続性という観点から啓蒙思想をながめるにしても、そもそもその古代的伝統において“政治哲学=公共哲学”という等式が普遍的に妥当したとはいえない。ビザンツからイタリア諸都市へとヘレニズム思想が移植される当初の段階から問題となっていたプラトンとアリストテレスをめぐる論争はその後も尾を引き、『人間の尊厳』のピーコが活躍したプラトン・アカデミーからケンブリッジ・プラトン主義者や清教徒革命期の共和派(H.ネヴィルら)まで、人文主義思潮に占める近世ヨーロッパの新プラトン主義者の位置は無視できないものがあるが、ケンブリッジの政治思想家たちは主にアリストテレスやキケロらの受容に目をむけ、プラトン解釈との関係に十分な注意を払ってきたとはいいたい。

いうまでもなく、こうした新プラトン主義的政治哲学に着目するならば、ヘルメス主義やカバラの神秘主義とも切り結ぶ古代異教哲学において政治が公共的というよりはむしろ秘教的な性格をもって描かれる点に関心がむかう。一神教世界における異教的哲学の保存は、秘教主義の著述技法によってはたされてきたというのがシュトラウスの見立てであった(それがレッシングなど啓蒙を代表する思想家たちにおいても依然としてある程度知られていたとも彼は示唆している)。12世紀ルネサンス以来、東方オリエントの先進的知を摂取して徐々に文明化を進めてきたヨーロッパでは、ときに急進主義的な含意も有する「危険思想」にアクセスする回路は、アラビア語の文芸共和国であり、ユダヤ的知のネットワークだった。したがって、ごく一部の東洋学者をのぞいて、こうしたグローバルな知の共同体への扉は秘教的装飾によって実質的に閉じられていたのであり、その場合の公共性や共和国とは、厳格な参入資格(membership, citizenship)を獲得した哲人たちのあいだでの平等性と相互性だったというべきだろう。ただ、今年のWSで論じたように、学派の秘教的で閉鎖的な性格が誇張されがちな当のシュトラウス本人が、こうした学問共同体内部の根本的に反君主政的で公共的な性質をも強調している点は、けっして逸されてはならないだろう。

近年の啓蒙思想研究では、文脈主義への批判から普遍的真理を主張する啓蒙の哲学的性格をあらためてとりあげようとする動向も認められる。その筆頭であるジョナサン・イスラエルが、急進的啓蒙とその中核としてのスピノザ主義という道具立てを借りてくるのもシュトラウスである。主張内容の中心が民主主義か無神論かという点で両者は対立するが、それが普遍的な価値であり、真理の危険性ゆえにそれは支配者・多数者から秘匿されて主張されねばならなかったと見る点で共通する。遡れば、トクヴィルを先駆的に受容したコシヤンが革命前夜の文芸的公共圏の反公共的性格を描きだしているし、コゼレックも陰謀論や神秘主義的言説を重視した啓蒙像を提示している。結局のところ、スピノザ自身が啓蒙の秘教性と公共性の両面を体現していたのだろう。信仰ではなく理性による真理の自由な探究としての哲学を可能にする条件として、スピノザは一方では、ある種の政教分離にもとづく自由な言論空間を構想した。だが、『迫害と著述の技法』が描くことになるのは、哲学を擁護すべく秘教的技法を駆使する中世的知識人に連なるスピノザの姿でもあったからである。